No. 97 975（右）は
パテック フィリップ最初の
永久カレンダー腕時計であり、
世界初の永久カレンダー
腕時計であった。
また96モデル（左）は、
初めてレトログラード
日付表示永久カレンダーを
腕時計の微小なスペースの
中に組み込んだ。
これらの技術革新が、
コンプリケーテッド・
リストウォッチの巨匠としての
パテック フィリップの
名声の礎となった。

将来を予言する

遠い未来の日付を予見できる永久カレンダーは、常に愛好家、コレクターから熱狂的な支持を受けてきた。過去を振り返ると、パテック フィリップの永久カレンダーは明確に跡づけることのできる血統を持っており、それはこのグランド・コンプリケーションの性格にきわめてふさわしいものといえる。

文 ニック・フォークス　翻訳 小金井 良夫

3時位置にあるムーンフェイズ表示窓のすぐ下に、97 975という番号が小さく記載され、それを包み込むようにPATEK PHILIPPE & CIE GENEVEの銘が見える。この社名と番号は、時計史において重要な意味を持っている。

パテック フィリップの名と切り離すことのできないすべてのコンプリケーション機能の中でも、永久カレンダーは、おそらく最も豊かで神秘的な連想を与えるものといえよう。微小な機械仕掛けが将来を予言するという事実には、何か魔術的なものがある。各月の長さが毎月同じでなく、4年毎に2月の日数が増えるというグレゴリオ暦の煩瑣な規則をすべて考慮して、オーナーに遠い未来の曜日、日付、月齢を知らせるのである。

永久カレンダーは、きわめて早い時期からパテック フィリップの名と結びつけられてきた。そして他の多くの分野におけると同様、アドリアン・フィリップの発明の才は1889年、パテック フィリップの永久カレンダー機構を保護する技術特許No.1018となって結実した。

19世紀末になると、永久カレンダーは黄金時代のアメリカにおいて富豪たちの収集の対象として流行した。それは16世紀末から17世紀にかけてオランダの豪商たちが、命あるものはやがて朽ち果てることを自ら戒めるため、死を象徴する画題に代わるものとして食べ物、飲み物、花などの静物画を好んで描かせたのと似ている。文化の異なるアメリカの富豪たちは、チョッキのポケットに永遠を忍ばせる、というアイデアに魅了されたのである。威張りかえった紳士も、彼自身と子孫が死に絶えた後も正確に日付を知らせ続ける時計の存在を前にしては、謙虚にならざるを得ない。

パテック フィリップのNo.97 975は、そのような時計の完璧な例であ

クォーツ危機最中の1985年に発表された超薄型の3940モデル（左）は、伝説的な自動巻ムーブメント、キャリバー240 Qを搭載していた。

その顕著な薄さは、ムーブメントに統合された22金偏心マイクロローター（1977年にパテック フィリップが特許を取得）により実現された。

る。4つのサブダイヤルが羅針盤の方位目盛のようにシンメトリックに配置され、ブルースチールのスペード型時、分針がエレガントな文字盤上を回る。針のように細い第3の指針が分スケール外周の目盛上に日付を表示する。

No・97 975の独自性をさらに高めているのは、革バンドを保持するラグに施されている美しい彫金である。このタイムピースは、パテック フィリップ最初の永久カレンダー腕時計であった。そればかりか、知られる限り最初の永久カレンダー腕時計でもある。

1925年に発表されたこのモデルは、時計史上の重要な変化を告げている。これに先立つ時代、腕時計は活動的な人々の間の単なる最新流行に過ぎず、真の時計は懐中に持つべきものであった。しかしNo・97 975がデビューしたことにより、それまで威儀を正したゴールドの懐中時計にのみ搭載されていた高貴な永久カレンダー機構が、手首にその活躍の場を移した。そして腕時計は「一人前」となったのである。

さらに永久カレンダー腕時計の発明こそが、コンプリケーテッド・リストウォッチの巨匠としてのパテック フィリップの名声の礎となったことも忘れてはならない。1937年パテック フィリップは、革バンド付96モデルに腕時計としては初めてレトログラード日付表示永久カレンダーを搭載した。マニュファクチュールパテック フィリップはその後、このようなマスターピースを次々に創作し、コンプリケーテッド・リストウォッチ分野における初期の優位をさらに強化していくことになる。

1940年代初めに登場した1526モデルは、パテック フィリップ初のシリーズ生産による永久カレンダー腕時計である。手巻キャリバー12・120Qを搭載したこのモデルは、1941年から1951年まで約10年間にわたり製作され、文字盤上部に曜日と月を並べて窓表示し、ムーンフェイズと日付表示サブダイヤルを文字盤下半分に配置した独特の文字盤デザインを定着させた。その後40年間にわたり、この構成は腕時計デザインの模範となった。

1526モデルの伝説的な後継機種としては、1950年代の手巻2497および2438／1モデル、そして1962年に発表された初の自動巻永久カレンダー3448モデルがある。後者に搭載された著名なキャリバー27・460Qは1980年代中頃まで継続して製作されたが、3時～4時位置のドット状の閏年表示窓により一目でそれと分かる3450モデルを最後に製作終了となった。

1962年 3448モデル

ケース径37.5 mmの3448モデルは、初の自動巻永久カレンダー腕時計である。著名なキャリバー27-460 Qを搭載。

1951年 2497モデル

ケース径34 mmの1526モデルの後を継いだ直径36.7 mmの2497モデルは、永久カレンダーとしては初めてセンターセコンドを備えていた。手巻キャリバー27 SC Qを搭載したこのモデルは、2499モデル（ケース径37.7 mm）と同時期のものである。

1925年 No. 97 975

パテック フィリップによる世界初の永久カレンダー腕時計No. 97 975。1898年に製作された婦人用ペンダント・ウォッチ用手巻ムーブメントを搭載している。直径34.4 mmのケースは、美しい手彫金が施されたラグなど、装飾性に富むデザインを誇る。

1981年 3450モデル

ケース径37.5 mmの自動巻3450モデルは、ドット状の閏年表示窓が一目でそれと分かる特徴となっている。搭載されたキャリバー27-460 Qは、1980年中頃、このモデルを最後に製作終了となった。

1955年 2438/1モデル

長方形植字インデックスと、ケース径36.7 mmの2497モデルと同じカーブした鈎爪型のラグを備えたケース径37 mmの2438/1モデルは、1950年代のより大胆なデザイン傾向を示している。キャリバー27 SC Qを搭載。

1937年 No. 860 182

パテック フィリップ最初のレトログラード日付表示永久カレンダー搭載腕時計、96モデルのデザインは、今日伝説となっている。バウハウス運動、後期アールデコ、モダニズムからインスピレーションを得ている。直径30 mmのケースには11リーニュの手巻ムーブメントを搭載。

1985年 3940モデル

3450モデル（直径37.5 mm）の後継機種であるケース径36 mmの自動巻3940モデルは、搭載されたキャリバー240 Qにより超薄型のケースを実現している。それまでの長方形の表示窓が、9時と3時位置のサブダイヤルに置き換えられた。

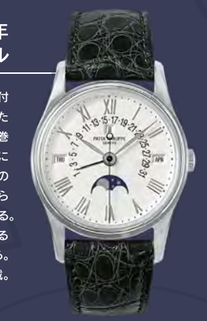
1961年 3449モデル

3449モデルは、3点のみ製作された、きわめて希少なモデルである。このケース径37.5 mmの腕時計は、永久カレンダーを備えた手巻キャリバー23-300 Qを搭載したパテック フィリップ唯一のモデルである。

1941年 1526モデル

パテック フィリップ初のシリーズ生産による永久カレンダー腕時計、1526モデルは、文字盤上部に並んだ2つの窓表示、文字盤下半分にサブダイヤルを配置した独特の文字盤デザインを定着させた。直径34 mmのケースに手巻キャリバー12-120 Qを搭載。

1993年
5050モデル



特徴的なレトログラード日付表示の弧状目盛を備えたケース径36 mmの自動巻5050モデルは、1937年に発表されたずっと小型の96モデル（直径30 mm）からインスピレーションを得ている。最初のシリーズ生産による永久カレンダーである。キャリバー315 S QRを搭載。

2008年
5139モデル

3940モデル（直径36 mm）の文字盤レイアウトに立ち戻った5139モデルは、ケース径が前者より2 mm大きく、ベゼルのクルー・ド・パリ装飾とオフィサータイプの直線ラグを特徴とする。3940モデル同様、キャリバー240 Qを搭載。

2012年
5940モデル

自動巻キャリバー240 Qを搭載した5940モデルは、クラシックな永久カレンダーをイエローゴールドのクッション型のケース（ケースサイズ37 x 44.6 mm）に搭載している。写真のホワイトゴールド・モデルは2015年に発表された。1990年代に発表された永久カレンダー・クロノグラフ5020モデル（ケースサイズ37 x 45 mm）も、このフォルム（クッション型）を特徴としている。

2006年
5140モデル

ケース径37.2 mmの自動巻5140モデルは、ひとまわり小さな3940モデル（直径36 mm）の後継機種であり、指針表示の文字盤レイアウトに立ち戻っている。6時位置の日付表示サブダイヤルが前者より大きくなっている。キャリバー240 Qを搭載し、超薄型のシルエットを実現している。

2011年
5496モデル

自動巻5496モデルは、1937年に創作され、1993年に改良が加えられたレトログラード日付表示の根強い人気を示している。文字盤デザインはほとんど変わらないが、ケース径がひとまわり大きな39.5 mmとなっている。キャリバー324 S QRを搭載したプラチナ仕様の5496モデルは2011年に発表された。写真は2015年発表のローズゴールド・モデル。

2013年
5160モデル

キャリバー324 S QRを搭載した自動巻5160モデルは、文字盤中央に手仕上げギヨシェ装飾、直径38 mmのケースに精緻な手彫金が施されている。パテック フィリップの希少なハンドクラフトを愛する人々へのトリビュートであり、ラグに美しい手彫金が施された1925年製作のNo. 97 975（ケース径34.4 mm）に対する敬意の表れでもある。

2007年
5159モデル

自動巻 キャリバー315 S QRを搭載した5159モデル（ケース径38 mm）は、曜日、日付、月、閏年サイクルを窓表示するまったく新しい文字盤レイアウトを採用している。手仕上げギヨシェ装飾を施した文字盤には、中央に弧状のレトログラード日付表示目盛を備える。

2012年
7140モデル

ケース径35.1 mmのレディス・ファースト・パーペチュアル・カレンダー7140モデルは自動巻キャリバー240 Qを搭載している。クラシックな永久カレンダー表示を採用しているが、乳白色の文字盤とベゼルにセッティングされた68個のダイヤモンドが女性らしさとエレガンスを与えている。

2014年
5140モデル

キャリバー240 Qを搭載した超薄型の自動巻5140モデル（ケース径37.2 mm）は、2006年に創作された。写真は、2014年に発表され、エボニーブラック・ソレイユ文字盤にダイヤモンド・インデックスを配した、イブニングにふさわしいエレガントなプラチナ・モデル。

1980年代は、「クォーツ危機」（1970年代～1980年初めの日本製ハイテク・クォーツ・ムーブメントの登場が機械式時計の存続を脅かした）により、伝統的な機械式タイムピースにとっては受難の時代となった。この激動の時期に登場し、No・97975に比肩し得る重要性を持つに至ったタイムピースがある。1985年に発表された3940モデルは、機械式コンプリケーテッド・ウォッチの復興を告げるタイムピースであった。1977年に登場し、ムーブメントに統合された22金偏心マイクロローターを特徴とする著名なキャリバー240の派生キャリバーである、キャリバー240 Qを搭載していた。キャリバー240のアーキテクチャーは、比類なくエレガントなパテック フィリップ・タイムピースの創作を可能にした。永久カレンダーを備え、275個の部品から構成されるキャリバー240 Qでさえ、その厚さはわずか3・75ミリメートルに過ぎなかったのである。今日もなお替えられるべきこの技術的壮挙が、1980年代の暗い時代においていかに大きな奇跡であったかは推して知るべしであろう。

3940モデルは技術的偉業であったと同時に、パテック フィリップの永久カレンダーに新しい顔を与えたモデルでもあった。それまでの曜日・月表示窓が、9時と3時位置のサブダイヤルに置き換えられた。このムーブメントと文字盤デザインの組み合わせは、現行コレクションの5139モデルや、同じ文字盤レイアウトをまったくスタイルの異なる美しいクッション型ケースに応用した5940モデルに踏襲されている。

1993年、パテック フィリップは、永久カレンダー分野における技術革新の歴史へのオマージュとして5050モデルを創作した。8時～4時位置の弧状目盛を特徴とするレトログラード日付表示を備えたこのタイムピースは、1937年に発表された歴史的な96モデルの後継モデルであることが明らかである。9時と3時位置の表示窓に曜日と月を表示するという点も共通しているが、5050モデルでは12時位置に閏年サイクルを表示する小窓が加えられている。これと同じ構成は、今年ローズゴールド・バージョンが加えられた5496モデルにも見られる。

永久カレンダーにおいて曜日と月を表示する2つの方法（表示窓によるかサブダイヤルによるか）のうち、2012年に発表された7140モデルはサブダイヤルによる表示方法を採用している。パテック フィリップの永久カレンダーのデザイン的血統を正統に受け継ぐこの婦人用モデルは、ますます多くの女性たちのコンプリケーテッド・ウォッチへの要望に応え、よりデリケートでスリムなプロポーションを持っており、ベゼルにセッティングされたダイヤモンドがこれをさらに強調している。

パテック フィリップの永久カレンダーを正統に受け継ぐこの婦人用モデルは、ますます多くの女性たちのコンプリケーテッド・ウォッチへの要望に応え、よりデリケートでスリムなプロポーションを持っており、ベゼルにセッティングされたダイヤモンドがこれをさらに強調している。

パテック フィリップの永久カレンダーの歴史は、「パテック フィリップ マガジン・エクストラ」（patek.com/owners）にて、この記事の特別関連コンテンツをご覧いただけます。